

山岳スキーのオリンピック競技化

笹生 博夫 ((公社)日本山岳スポーツライミング協会・山岳スキー委員長)

山岳スキー競技の概要と日本での展開については、すでに澤田実氏が『登山研修』vol.33 (pp,67-70)において包括的な記事を執筆している。本稿では澤田氏の記事以降のこの競技をめぐる新しい動きとオリンピック競技種目化について触れたい。(なお、澤田氏は2019年5月にカムチャッカ半島カメニ峰遠征中に遭難死された。)

去る2021年7月20日、東京オリンピックにあわせて開催されたIOC東京総会において、山岳スキーが2026年ミラノ・コルチナ大会の競技として採用されることが満場一致で決定された。アルペン競技などはスキー場を使うが、山岳で行われる競技がオリンピックで採用されるのははじめてである。

国際山岳スキー連盟 (ISMF) は、多くの競技団体と互して永年オリンピック競技としての採用を目指して来た。2020年スイス・ローザンヌで開催された第3回ユース・オリンピック冬季大会で競技として採用されて重い扉が開き、今回の2026年大会での競技化が実現した。イタリアはこの競技の強豪国であり、開催国が強い競技が採用されるのは良くあるので、2022年北京大会でなく2026年大会で採用されたことに特に驚きはなかった。

オリンピックで実施が予定されている種目は、スプリント (男女)、インディビデュアル (個人一男女)、混合リレーの五種目 (男子2、女子2、男女混合1) である。

参加選手総数が48名でアジア枠は4名から6名と想定されるので、日本人選手をこの枠内に確保し、できるだけ上位に日本選手をすることが当面の目標

となる。伝統的にヨーロッパ・アルプス周辺国が強いのでスポーツライミングのように、日本選手がメダルに絡むような活躍をするのはやや難しいかもしれないが、ノルディック競技やトレラン、スカイランニングの選手、さらにマウンテンバイクなどからの有力な選手が参入してくれば状況は変わるかも知れない。



世界選手権スタート

実施予定の各種目の概要は以下の通り

スプリント：図1のとおり標高差80m程度のゲレンデ内の斜面の中をスキーで登り、スキーを外して歩いての登りとスキー滑降を合わせて一周3～5分程度のコースを設定して争われるスピード感あふれた競技である。(1)のリンクから動画が見られる。

個人：主にオフピステを使って合計標高差が、女子1300～1600m、男子1600～1900m。距離は、15km。レース時間は、1.5～2時間程度のコースを上り下るダイナミックな競技で大会の華となる競技。(2)のリンクから動画が見られる

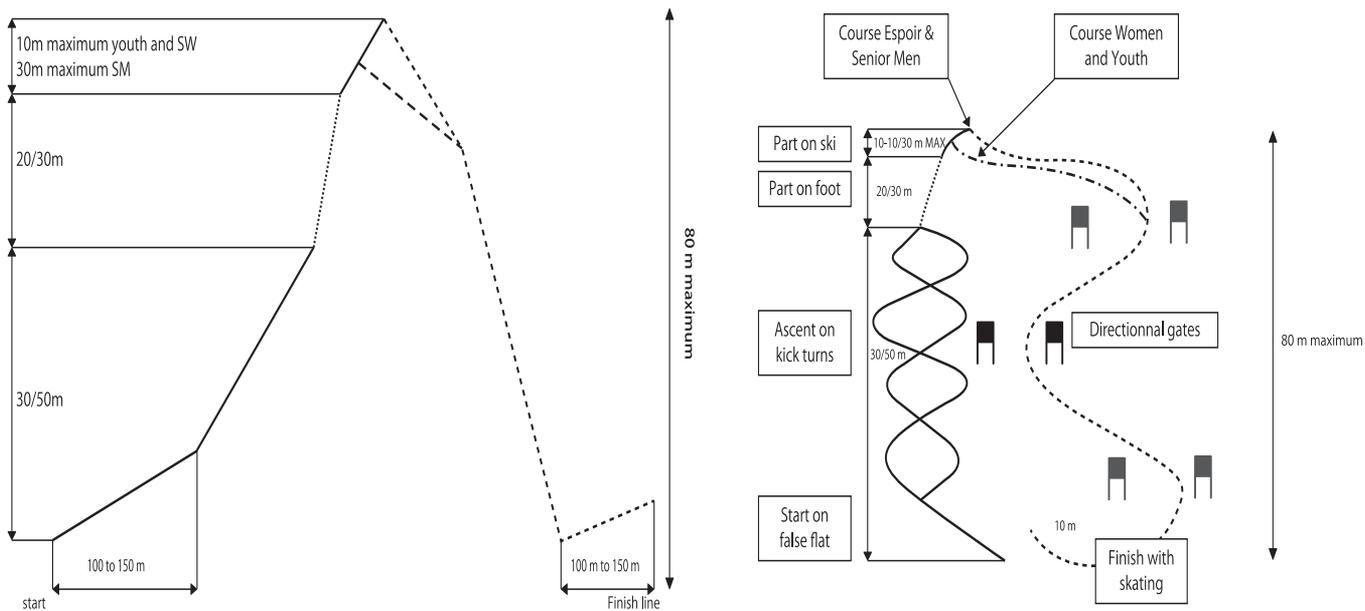


図1 スプリント競技のコース概念

—— がシールを着けての登り がつぼ足での登り - - - - が滑降

リレー：スプリントのコースをやや拡大したコースを男女4人の選手がつなぐレースである。

オリンピック種目以外の種目では、バーチカルとチームレースがある

バーチカルは、文字取り登りのタイムだけを競う競技で、標高差700m程度のコースを一気に登るが、タイムは40分前後になる。この競技のトップ選手は標高差1,000mを60分以下で登る。

チームは、2～3人で一緒に登り滑る競技だが、通常インディビジュアルより長い距離のコースが設定されアルプスのナイフリッジを駆け抜ける選手の映像は非常に画になる。伝統的な長距離レースは数日間をかけて競われるチームレースで、近年は藤川選手など日本からもこうした大レースにチャレンジする選手がでている。

この競技に使われる用具は、山スキー山行で使われる用具に比べレース用により軽量されたもので、たとえばブーツは570グラム、スキーは900～1000グラム、ビンディングは17～180グラム程度である。レー



個人レース、登りでも駆け上がる



稜線付近を登る選手

4. その他

ス用に軽量化を追求している為、価格は高いが、耐久性には劣る。

ちなみに通常の山スキーに使われる用具の重さは、ブーツが1400～1900グラム、スキー1200～1700グラム、ビンディング560～1500グラムである。この競技が普及し始めてから一般の山スキー用具も軽量化がすすみ、特にブーツやビンディングは、20年前の製品と比べると非常に軽量になっている。これは、特に中高年山スキー愛好家にとって思わぬ恩恵となっている。

日本で、山スキー縦走ルートにレース用またはそれに近い規格の用具を使ってタイムチャレンジすることの嚆矢となったのは、本誌vol.33に山岳スキーについて寄稿した澤田氏の黒部横断の記録である。澤田氏は、筆者とともに2004年スペインのピレネー山脈で開催された山岳スキー世界選手権に参加し、本場の山岳スキーレース用具と技術に触れたが、それを日本のフィールドに持ち込み、帰国後すぐに黒部横断のスピードチャレンジに挑み、大町日向山ゲートから立山駅まで11時間18分の記録を作った。

凍った黒部湖の徒渉も含まれる水平距離38km、累計登坂標高差2454m、下り2974mのルートである。

(2004年3月)前出の記事で、澤田はその記録に簡単に触れているだけだが、驚異的な記録である。この記録が日本における山スキー・ツアースピード記録の1ページ目となる。

2021年の山岳スキー日本選手権で優勝した若手有力選手の島徳太郎選手は今年の3月、同じルートを渋沢暉とのペアで8時間22分で抜けて澤田氏の記録を更新した。詳細は(3)参照

こうして記録が生まれ、また更新されて行くのを見るのはうれしい。島選手は年齢もまだ22才と若く、2026年ミラノコルチナオリンピック大会に向けて大いに期待できるので、レースや山スキー・ツアース

ピード記録などに挑戦して実績を積んでほしいと願っている。新型コロナウイルスの世界的大流行の為、海外大会へ参加して経験を積むことが出来ないのは問題である。大流行が一日も早く終息することを願うばかりである。

日本選手権で7連覇を記録するなどした実力者である藤川健選手は北海道札幌を拠点にする選手で、この競技に参加することで得た技術と用具を使って澤田の後を追いつ山スキー・スピードツアーに挑んでいる。藤川選手は日本のオートルートとして知られる室堂～上高地70kmを2017年5月、無補給で20時間7分12秒で走り抜けている。

今後この記録に挑戦する選手が出てくるのも時間の問題であろう。ヨーロッパでは、この程度の距離の山岳スキーレースがいくつも行われているが、日本でもトレランのトランスアルプスレースのようにこのようなルートで山岳スキーレースが行われる日が来るかも知れない。

ピオレドール賞を受賞した平出和也氏にレースに出てもらったところ、2000mから3000mを越える雪山で心肺能力を目一杯使うこの競技を評して「ヒマラヤ遠征のトレーニングにちょうど良いですね」と言ってくれた。

藤川選手のチャレンジは室堂～上高地に留まらず、夕張全山54km、占冠村林道三角山線から富良野スキー場まで16時間6分(2020年3月31日)という記録も出している。詳細については(4)、(5)参照

トレイルランニングの隆盛に比べ山岳スキーは競技人口が200人～250人程度と極めて少数なのは、用具が高価であること、大会数が少ないこと、一般への競技認知度が低いこと等が要因として考えられる。2005年に始まった日本選手権で育った選手達が地元に戻ってレースを企画するなどして、ここ数年レース数がやや増えてきたが、競技人口増につながっ

ていない。日本は、アジアの中では山スキーに適した山地と積雪めぐまれているのだから、オリンピック競技化を機会に認知度が高まり、競技人口が増えることを期待している。こうした課題の多くは、すでに澤田氏が本誌vol.33の記事で指摘しているが、まだ道半ばである。2030年冬季オリンピックが札幌に決まれば、札幌での競技実施が視程に入ってくるので競技統括団体である私どもJMSCAに課せられた荷は大きい。

【参考】

- (1) スプリント競技動画

https://www.youtube.com/watch?v=f_ghoomsLMs

- (2) 個人競技動画

<https://youtu.be/JQefYy3S9GU>

- (3) Rock & Snow 092 P58-59

- (4) 室堂一上高地の記録詳細

<http://telemark.fujiken.boy.jp/?eid=1282545>

- (5) 夕張全山縦走記録詳細

<http://telemark.fujiken.boy.jp/?eid=1283395>